

## ディケンズと児童文学

### Charles Dickens and Children's Literature

出水純子

Junko Demizu

キーワード：チャールズ・ディケンズ、『ホリデイ・ロマンス』、「子どもの星の夢」、『ハウス  
スホールド・ワーズ』、『オール・ザ・イヤー・ラウンド』、フェアリー・テイ  
ル（妖精物語）

Keywords: Charles Dickens, *Holiday Romance*, 'A Child's Dream of A Star,' *House-*  
*hold Words*, *All the Year Round*, Fairy Tales

#### Summary

Charles Dickens (1812-70) is the most famous novelist of the Victorian age and he was the first novelist to have introduced children into English Literature. He was a supporter of fairy tales. He confesses that his first love was a red riding hood in 'A Christmas Tree', which appeared on a weekly magazine *Household Words* conducted by Dickens himself. In 'Frauds on the Fairies' (*Household Words*, 1 October 1853) he criticized George Cruikshank's *Fairy Library* for its attempts to rewrite the traditional fairy tales with moralistic purposes.

Dickens had 'the vision of the child'. He understood the characters and consciences of children. In his essay 'Where We Stopped Growing' (*Household Words*, 1 January 1853), he says 'We have never grown the thousandth part of an inch out of Robinson Crusoe.'

He wrote a short fairy tale, 'A Child's Dream of A Star,' in *Household Words* and his short novel, *Holiday Romance* (first published in the American magazine *Our Young Folks* and serialized in 1868 in *All the Year Round* in Britain). *Holiday Romance* influenced much on the writers of children's literature in his time. For instance, 'Lovesick boy story' are found in Mark Twain's *Tom Sawyer*, and 'a boy narrator' is seen in E. Nesbit's *The Story of the Treasure Seeker*. 'Pirate's Adventure story' was put into J.M. Barrie's *Peter Pan*.

Charles Dickens wrote about youth in all its aspects. He wrote books on behalf of children. Though he is not a writer of children's literature, he is a great novelist contributed to English Children's Literature.

はじめに

児童文学と文学の境界線を引くのは非常に難しい。文学の世界では、児童文学は子どもにも読める文学であり、決して子どものためだけの文学ではないという見解が一般的である。人間は年輪のように成長すると言ったのは、谷川俊太郎という詩人である。人間は誰でも心の中に子どもの部分を持っているものだ。自分の中の子どもの大切を保持し、子どもの心を誰よりも理解していた英国の作家と言えばチャールズ・ディケンズであろう。

チャールズ・ディケンズ (1812-1870) は英国を代表する偉大な小説家であり、児童文学史の中に登場する作家ではない。しかし、ディケンズは子ども時代に読んだ妖精物語の影響を大きく受けており、『クリスマス・キャロル』(1843年)<sup>1</sup>や、『ホリデイ・ロマンス』(1868年)など児童文学といってもよい、子どもが読んでも楽しめる作品を多く残している。ジャック・ザイプスは「妖精物語に親しんだ体験が『ドンビー父子』、『デイビッド・コパーフィールド』、『大いなる遺産』のような作品を生み出す原動力となった」と述べている。『チャールズ・ディケンズの子どもたち』の著者、T. Donovan は、英国作家の中で子どもが中心的役割を果たす小説を書いたのはディケンズが最初であるとし、ディケンズの小説15冊(『ピクウィック・ペーパーズ』も含めて)の中で、子どもが中心にならないものはたった4作品だけである(p.3参照)と述べている。

ディケンズは、児童文学作家ではないとしても、後世の児童文学作家に与えた影響の大きさは、計り知れない。例えば、アメリカではマーク・トゥエインの『トム・ソーヤの冒険』(1876年)<sup>2</sup>、英国ではケネス・グレアムの『黄金時代』(1895年)や、子どもを語り手としている点でE.ネズビットの『宝探しの子ども達』、海賊ごっこ物語としてバリーの『ピーター・パン』などがある。

本論ではディケンズ自身が1850年(38歳)に創刊して、一人で出資、経営し、編集長を務めるかたわら原稿執筆までしていた週刊雑誌『ハウスホールド・ワーズ』(「聞きなれた言葉」という意味)<sup>3</sup>(図1参照)に掲載された「子どもの星の夢」(図2参照)と、最初はディケンズ自身の雑誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』(図3参照)に連載され、後に小説として出版された『ホリデイ・ロマンス』を取り上げて、ディケンズと児童文学との関係について、フェアリー・テイルというジャンルから考察する。

「フェアリー・テイル」は、「妖精物語」と訳されているが、「赤頭巾」や「ジャックと豆の木」のように、必ずしも妖精が登場するわけではない。日本では「童話」、ドイツでは

「メルヘン」と呼ばれる児童文学のジャンルである。細かく言えば、ディケンズのフェアリー・テイルは、アンデルセン童話<sup>4</sup>から始まった「創作童話」であり、英国では昔話の再話である「フェアリー・テイル」と区別して「リテラリー・フェアリー・テイル」と呼ばれる。「リテラリー・フェアリー・テイル」は、児童文学史上では、フェアリー・テイルと19世紀に登場する長編のファンタジー文学との中間に位置する。本論では引用文を除いて、「妖精物語」と表記することにする。

## 第1章 ディケンズの妖精物語についての考え方

ディケンズは、妖精物語についての考え方が文学の基礎にあると言っている。お説教や教訓物語はこどもの思考を止めてしまうと考えていた。『ハウスホールド・ワーズ』1953年1月1日号の「われわれの成長の停止したところ」と題したエッセイで、私は『ロビンソン・クルーソー』を読んだ時から成長が止まっていると次のように書いている。

.....幼年時代はとても美しく、魅力的なので、思慮深い評論家向けの深遠な問題を脇に追いやっても、また何かに愛着を持ったり強い執着心を抱いたとしても、それでも自分が子どもではない何かに変化していくことに、普通の人々ほどことなく痛ましさを感じているものだ。.....

我々は『ロビンソン・クルーソー』を読んだ時から1インチの何千部の1たりとも成長していないのだ。ロビンソン・クルーソーの方も我々がごく小さかった時と少しも変わっていない。彼が飼っていたオウムや犬、野鳥を撃つ銃、ほら穴で出くわした恐ろしい目つきをしたヤギ、錆びついたコイン、帽子や傘も、この物語を読んだ幼年時代から少しも成長していない。(P.145)

自分の中に「子ども時代」をとどめておきたいという上記のエッセイについて松村昌家氏は、『子どものイメージ—19世紀英米文学に見る子どもたち』の中で、「小説家としてのディケンズが、子ども時代に関して、ワーズワースの遺産を受けついでいることを証明しているようで、注目に値する」と述べている。ワーズワースの遺産を受けついでいるというのは、ワーズワースと同様「子どもは大人の父なり」と考えていたということである。

また同誌1850年12月21日号に掲載したエッセイ「クリスマス・ツリー」では赤頭巾ちゃんが初恋の人だったとも書いている。大きなテーブルの中央に飾られたクリスマス・ツリーを囲んで集まった陽気な子ども達をながめながら、エッセイはディケンズの幼年時代の頃の楽しいクリスマスの思い出が甦ってくるころから始まる。両手をポケットに突っ込んだ起き上がりこぼしの人形、嗅ぎ煙草入れ、蠟で作ったカエル、ロバや黒馬の人形、人形

の家や、アルファベット絵本等、モミの木に飾りつけられたおもちゃを見た時の思いが次々と描かれ、その中で『赤頭巾』について、ディケンズは次のように書いている。

クリスマスの素敵な物といえば真っ赤なマントである。モミの木が森となりその中を、手にバスケットを持った赤頭巾ちゃんが、クリスマス・イヴに私のところにやって来るのだ。あの残忍で狡猾な狼、おばあちゃんをあっという間に食べてしまったあの狼、さらに恐ろしい歯について例のふざけた問答をした後、赤頭巾ちゃんまで食べてしまう。赤頭巾ちゃんは私の初恋の人だったのだ。できることなら赤頭巾ちゃんと結婚できれば最高に幸せだと思ったものだ。…… (p.291)

子どもの心を持つことの大切さと、子ども時代に妖精物語を楽しむことで想像力が育まれ、例えば、愛する人が殺されてしまうことが、どんなに悲しくて、心痛むことであるかなど、人の痛みが分かる大人になるのだとディケンズは考えていた。ジャック・ザイプスは、ディケンズが「妖精物語に執着するのは、彼が子ども時代に体験した、窮屈な銜学趣味や狭量さ、宗教的鍛錬への反抗である」(p.89)と述べている。「自由な想像力と忍耐、希望を持って、妖精の国にやってきた」(p.89)ディケンズは、『シンデレラ』を禁酒協会の宣伝に変えてしまった、当時の社会風刺画家・挿絵画家であるジョージ・クルックシャンク(1792-1878)と論争した。この問題に関して、『ハウスホールド・ワーズ』1853年10月1日号に掲載した「まやかしの妖精物語」で、「クルックシャンクが『シンデレラ』を改ざんした。これはまるでまちがってはえた雑草のようなものである。『ロビンソン・クルーソ』からラム酒や、火薬や原住民を取り去って、菜食主義者版や原住民保護団体版を作るようなものだ」と述べ、ディケンズ自身が創作した営業マンが推奨する『新シンデレラ物語』を掲載して、クルックシャンクのした行為の愚かさを風刺している。

「まやかしの妖精物語」の冒頭で、ディケンズは、「幼年時代に持っていた妖精物語を愛する気持ちを私たちが持ち続けていることはなんら異常なことではない」(p.97)と述べている。さらに、「妖精物語は、子どもたちに動物への思いやりの心や、自然を愛する心を養い、妖精物語のお陰で大人たちはいつまでも若さを保つことができる。細いけれども、雑草のはびこっていない道を子どもたちと共に、喜びを分かち合いながら歩いていけるのである」と書いている。さらに、「あらゆる時代の中で、功利主義の時代にこそ、妖精物語は尊重されなければならない。英国の帝国主義はあまりにも強硬で、妖精物語のようなものは編纂しようとしなかった。しかし、この問題を考えたことのある人なら誰でも、空想やロマンスを持たない国は、この世で偉大な地位を築くことはなかったし、これからもありえないことを熟知している。妖精物語は守り続けなければならない。素朴で、

純粹に無垢なままで」(p.97)と述べ、国の将来をになう子どもたちにとって、いかに妖精物語の役割が重要であるかを力説している。

『シンデレラ物語』を改ざんしたクルックシャンクに対する批判は次のようになされている。

さて、我々の大切な友、クルックシャンクに賛成しても、しなくとも昔から語り継いできた妖精物語を彼が改ざんしたことに対するわれわれの異議申し立てになんら差異は生じない。……彼が何の害も及ぼさない話を書き変えたことは、我々が彼の優れた挿絵を改ざんするのと同様で、道徳的に許されることはない。(97頁)

ディケンズがクルックシャンクを「我々の友」と呼んでいるのは、彼がかつてディケンズの『オリバー・ツイスト』などの挿絵も描いていて高い評価を受けたという理由からである。クルックシャンクの挿絵の芸術性の高さは評価していても、子どもの想像力をないがしろにする、妖精物語の改ざんだけは黙認できなかった。

## 第2章 「子どもの星の夢」

ディケンズの創作童話に「子どもの星の夢」という作品がある。『ハウスホールド・ワーズ』1850年4月6日に掲載された。いつまでも「子どものままで、手に手を取って」自然の中でたわむれ、星を見つめていたいという願望は「子どもの星の夢」が書かれた前年の、1849年の長編小説『デイビット・コパーフィールド』ですでに言及されている。主人公のデイヴィットは、自然の中でたわむれることを至福とし、「星」になることが望みであり、彼にとっては真実である。この世は一次的な存在の場、幻でしかないという思いが次のように描写されている。

星の話も尽きてしまうと一というよりは、むしろ事實は、ミスタ・パーキスの理解が、限界にきてしまったのだが一あとは、エミリーと私と、古い部屋着を外套がわりにして、帰り着くまで、それをかぶって座っていた。私は、ほんとうに、エミリーを愛していた！

このまま、もし結婚ができて、どこか林の奥か、原っぱの真ん中にも行って暮らすことができれば、どんなに幸福なことだろう！ このまま年もとらず、なまじの知恵もつかず、いつまでも子供のままで、手に手を取って、明るい日光の中や、花咲く牧場を、さまよい歩くことが、もしできたら！ そして夜は、苔を枕に横になり、清い、平和な眠りを楽しみ、そしてもし死んだら、小鳥たちに埋めてもらう！（訳注「森の子供たち」という歌から。不幸な孤児が森の中で死に、駒鳥たちがそれを木の葉で埋めてやる話）

現実の世界は、全く入り込んでこない、ただ私たちの純真な光に照らされて、いわばあの遠い星屑のように漠然とした、そうした夢だけが、途々ずっと私の心をいっぱいにしていた。…… (pp.262-263)

『デイビッド・コパーフィールド』での、この星の話のエピソードが翌年出版された「子どもの星の夢」という創作童話へと発展したように思われる。「子どもの星の夢」の主人公は男の子で、仲良しの妹とまるで上記の引用箇所のように自然の中で「手に手を取って」たわむれ、幸せな日々を送っているところから話が始まる。

昔、一人の男の子がいた。その子はよくあちこち歩きまわり、いろんなことを考えていた。一人妹がいて、その子もまだ幼く、いつも二人で一緒に遊んでいた。二人はよく一日中歩き回った。美しい花を見つけては感激し、なんて青く澄んだ高い空なのだろうと見とれていた。きらきら輝く水面を見て小川がどれほど深いのだろうと考えたりした。そして、このすばらしい世界をお創りになった神様のやさしさと御業にも驚異の念をいだかずにはいられなかった。

二人はよくこんな話をした。もし世界中の子どもが死んでしまったら、お花も水もお空も悲しむかしら？ 二人はきっと悲しむに違いないと確信していた。なぜならつぼみは花の子どもだと言えるし、丘のすそ野を元気に流れる小川は水の子なのだから。それに夜空にまたたく星屑も星の子もたちなのだから、遊び友達の人間の子どもがいなくなったら皆な悲しむでしょう。(p.25)

物語を概略すると次のようになる。「教会の尖塔近くの墓地の上にひとときわ輝く一番星」が出る時間を二人はよく知っていて、すっかり星と友達になってしまう。その後、妹は病気で死んでしまう。男の子は悲しみの涙でうるんだ目を星を見上げると、「星の光が天と地をつないでいる」ように見えた。男の子は、星の夢を見た。それは天使が、一列に並んだ人々を星の光の道に連れて行く夢であった。男の子の妹もその列の最後について、天使のリーダーに「お兄さんも来るの？」と尋ねる。夢の中で男の子は自分も連れて行ってと叫ぶ。

それから弟が生まれるが、まだ言葉も話せないほど幼いのに死んでしまう。男の子はまた星の夢を見て、天使の群れが人々を星に導いていくのをみた。やがて男の子は成長して若者になった時、母親が死んでしまう。若者は星に向かって両手を伸ばし、自分も連れて行って、と叫ぶ。白髪交じりの大人になった時、今度は彼の娘が死ぬ。やがて老人になって死の床に横たわり、先立たれた妹、弟、母親、娘が待っている星に迎え入れられる。

「星は彼の墓の上で輝いています」という文章で話は終わる。

妹や弟、母親、娘が次々と死んで星になるという、かなり感傷的な童話であるが、ディケンズの子どもに対する愛情と理解の深さが読みとれる。子どもに「もし世界中の子どもが死んでしまったら、お花も水もお空も悲しむかしら？」というせりふは、子どもの「無垢」と「自然の心」を産業革命がもたらした物質主義から守りたいというディケンズの気持ちの表れである。「感傷性」は19世紀中葉を代表する作家を通して付け加えられた大きな要素である（松村、1992年 p.166参照）。孤独な魂が最後には天使に導かれ星となって輝くという結末は、孤独な巨人が子どもの姿をしたキリストに導かれて天に昇り、巨人の庭によく春が訪れるという、オスカー・ワイルド（1854-1900）の最初の童話集『幸福の王子その他』に収録された「わがままな巨人」（1888年）を思い起こさせる。

### 第3章 『ホリデイ・ロマンス』

『ホリデイ・ロマンス』はディケンズが1868年にアメリカでの講演旅行をした時に、アメリカの子どもの向けの雑誌『我らの少年少女たち』(*Our Young Folks*) 1月、3月、4月、5月号に連載され、同年に英国で自ら編纂する『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』(*All the Year Round*) (1868年1月～4月号)に連載された。6歳半から9歳までの中産階級の4人の子もたちが休暇中(ホリデイ)に作った、4つの非日常の中で空想した物語(ロマンス)からなっている。4つの物語は「冒険物語」「妖精物語」「海賊物語」「家庭のロマンス」というジャンルからなり、それぞれのあらすじは以下の通りである。

第1話「はじめのお話」—18世紀末から英国で始まった産業革命によって、物質主義、科学的合理主義(功利主義)がはびこり、妖精もいない世の中にしてしまった大人を教育するために、友達4人でお話をつくることになった経緯を、8歳のウィリアムが語る。

第2話「魔法の魚の骨」—4つのお話の中でも一番よく知られたものであり、『ヴィクトリア朝妖精物語』にも入れられている。7歳のアリシア姫が「家庭の天使」(ヴィクトリア朝時代の家父長制度のもとでは、主婦は家族のために奉仕する「家庭の天使」となることを求められていた)を演じながらも、家父長の座を乗っ取ってしまう。妖精はアリシア姫を結婚させてハッピーエンドで終わる。<sup>5</sup>

第3話「キャプテン・ポールドハートの冒険」—ラテン語の先生に侮辱されたため、海賊の船長になって未開の島々を制覇するうちに、追跡してきたラテン語の先生を絞首刑にしてしまう。

第4話「さかさま国のお話・大人の学校」—口うるさい大人を全員まとめて寄宿学校へ入れてしまう6歳半の女の子が作った話。

これら4つの話を連続して読むと、ディケンズに対する新しい発見がある。ディケンズの小説には『大いなる遺産』(1860年)など、子どもの目から描いたものはあるが、子ども自身が語るのはこの作品だけである。ディケンズは子どもの目から見た大人の社会を子どもに語らせ、しかも子どもの本音を語らせている。子どもが、子どもの声で本音を言い、うっぷんをはらしているところは、親の監視のもとで窮屈な生活を送っている現代っ子と重ね合わせ読むと興味深い。

では次に、ディケンズがどのような手法で、子どもに本音を語らせ、うっぷんをはらさせているのか、それぞれの話について考察してみたい。

第1話「はじめのお話」は『ホリデイ・ロマンス』という本が、なぜ子どもたちによって書かれるようになったのかを説明し、全体を統括する枠物語になっている。結婚ごっこに反対し、花嫁を監禁してしまった学校の先生をやっつけようと策略をねり、実行するが失敗してしまう。そこで相談してホリディ(夏休み)に大人に仕返しをするためにそれぞれが話をつくり、8歳のウィリアムが編集長を務めることになる。

第2話「魔法の魚の骨」は父権が絶対的権力を持っていたヴィクトリア朝時代にもかかわらず、王様はたよりなく、女王さまも、『不思議の国のアリス』(1865年)の絶対的権力を持つ女王とは正反対で病弱で無力な存在に描かれている。妖精も、魔法で願いをかなえてくれるやさしい妖精が登場する伝統的な妖精物語の裏返しになっていて、理屈や言い訳をする大人たちを懲らしめる。妖精が願いをかなえてくれる魔法の魚の骨に頼ろうとする王様に対して、主人公のアリシア姫は魔法にたよらず自分の才智で問題を解決する女性として描かれている。家族の世話を完璧にこなす「家庭の天使」でありながら、19世紀末に登場する自分の意志で行動する「新しい女」の先駆とも読める。物語の最後で妖精が、アリシア姫の弟を驚かせて怪我をさせたバグ犬にまでしかえしをし、バグ犬が魚の骨を喉に詰めて死んでしまったと一言付け加えることをディケンズは忘れない。ジャック・ザイプスが『ヴィクトリア朝妖精物語—妖精たちの反逆』にこの話を収録している理由もうなずける。

第3話は、ある意味で一番問題のある話である。というのも、9歳の男の子がラテン語の先生に侮辱されて登校拒否し、海賊の船長となって島の住民をヤバン人呼ばわりしたり、島の娘とふざけて結婚したりしているからである。これらは大英帝国の植民地主義を風刺するものであろう。J.マニングは『ディケンズと教育』で、バーナード・ショーの言葉を借りて、「ディケンズは自分の主張を笑いの蜜で包み、大衆の口の中に気づかれずにそっと一服盛ったのである」と述べている。

第4話は大人と子どものさかさま世界を描くことでディケンズは子どもに、大人に対して抱いているうっぷんをはらさせている。さかさま世界が、家庭でも学校でも管理されて



いたヴィクトリア朝時代の子どもの状況をありありと描き出している。中産階級の家庭では、「子どもには目を光らせても、耳はかすな」(Children are to be seen, and not heard) というのがヴィクトリア朝道徳であった。

『ホリデイ・ロマンス』の評価について、J.R.タウンゼントは「ディケンズの名前がついていなければ、顧みられることはなかったであろう」(p.131)と述べているが、この意見は当たっていない。本論の「はじめに」で述べたように、『ホリデイ・ロマンス』はディケンズ以降の児童文学作品の先駆けとなっており、後世の児童文学作家に与えた影響は大きい。19世紀のロマン派の児童観は、「子どもは純粹無垢で、神に近い」とされていた。ディケンズは無垢な子どもたちだけではなくて、大人のまねをそっくりそのままやってのけるしたたかな子どもをも描いているのである。「ヤバン人」の島の娘と「遊びで」結婚したり、家出をした息子を追いかけてきた、お節介な家族・親戚に「息子の身柄を引き渡す」と密かに合図を送っていた、ラテン語の先生を船のヤードで絞首刑にしたりというエピソードには、植民地側擁護、人権を無視した公開処刑の廃止、また詰め込み教育や、想像力を押さえつける教訓主義教育を批判した社会改革家としてのディケンズの一面も表われている。

## まとめ

ディケンズは、『ハウスホールド・ワーズ』に掲載したエッセイ「われわれの成長の停止した時」で「我々は『ロビンソン・クルーソ』を読んだ時から千分の一インチも成長していないのだ」と述べ、誰もが大人になっても子どもの心を持っていることを認識させている。また「まやかしの妖精物語」というエッセイでは、妖精物語を教訓話に改ざんすることの愚かさを訴え、禁酒協会のキャンペーンを『シンデレラ』物語に盛り込んだクルック・シャンクを非難するなど、子どもの文学の擁護者である。

ディケンズは、最晩年の短篇小説『ホリデイ・ロマンス』で、どんなに年をとろうとも妖精が戻ってくる日をじっと待ち続けることを誓い合う子どもたちを描いている。

「あたしたちは時がくるのを待つよ」とアリスはネティの手をとって、空をみあげながら答えた。

「ずっと待っていたら、世の中が違って、なんでも子どものためにしてもらえるようになって、子どもがおとなにバカにされたりとかもなくなって、そうしたら、妖精がもどってくるの。そういう時が今に来るって信じて、あきらめないで、待っていきましょう。80とか、90とか、100歳になるまで、こどもごっこをしながら、いっしょうけんめいその時がくるのを信じて、待ちましょう。そうしたら、妖精たちが、あたしたちのところ

にかわいい、かわいそうな子どもをつれてくるの。その子たちがいくつになっても子どもらしくしていたら、あたしたちが力になってあげるのよ」(翻訳、p.34)

妖精が戻って来るのを待ち、大人になったら子どもたちの力になってあげるという子どもたちは、「自由な想像力と忍耐、希望」を持って妖精物語を擁護する、まさにディケンズその人に他ならない。

ディケンズの童話「子どもの星の夢」に見られる感傷性と宗教的イメージを伴った死のモチーフは、産業革命期における犠牲者としての無垢な子ども像から生み出されたものであろう。ロマン派が発見した無垢な子ども像を引き継ぎながら、ディケンズは、子どもを様々な角度から描くことができた作家である。文学の世界での子どもの地位を確固たるものとし、子どもの声を代弁する文学を、社会の弱者である子どものために書いたディケンズは、20世紀の児童文学者の先駆けだと言えるだろう。

#### 注

- 1 松村昌家「解説」ディケンズ『クリスマス・ブックス』小池滋、松村昌家訳(ちくま文庫、1998年)特に『クリスマス・キャロル』は、子どもに愛されていた。ディケンズの死が伝えられると、ある子どもが「ディケンズさんが死んだんですって？サンタクロースのおじさんが死ぬことってあるの？」と尋ねた、というエピソードが紹介されている(p.335参照)。
- 2 Gillian Avery, 'Introduction,' Charles Dickens, *Holiday Romance and Other Writings for Children* (Everyman, 1995) 少年と少女の恋愛感情を描いたのはディケンズが初めてであるという。また『ホリディ・ロマンス』の中のボールドハート船長の子供の海賊物語は『ピーター・パン』の先駆となったと述べている(pp.xxv-xxvi 参照)。
- 3 *Household Words*『聞きなれた言葉』は1850年創刊の週刊誌、1859年の週刊誌 *All the Year Round*『一年中』に合併された。
- 4 ディケンズが初めてアンデルセンと出会ったのは1847年で、その後もアンデルセンがディケンズの家を訪れるなど交流を続けた。
- 5 永岡規伊子氏は、「ディケンズの作品における父と娘—『ドンビー父子』と『リトル・ドリット』を中心に」で、ディケンズの作品には共通したモチーフがある。母親不在の状況と、それに伴う娘の兄弟姉妹に対する母親役割、そして保護するものとされる者の立場が逆転した父親と娘の関係である(p.437)、と述べている。母親が病気のため17人の弟の世話をするアリシア姫の立場も同様である。ただ『魔法の魚の骨』にはディケンズの小説で描かれることのないプロットが一つだけ加えられている(p.451)という。それは「物語の最後で母親が病気から回復するというものである。……アリシア姫が母親を取り戻すことによって「小さな母さん」の役割を降り、一家に母性が回復される…

..小説では書き得なかったエンディングをもって、ディケンズの母親探しの旅が完結したといえるだろう」(p.451)と述べている。「魔法の魚の骨」という妖精物語がディケンズ文学の中で重要な意味を持っていることを示唆する興味深い論である。

- 6 主人公が、家族はもとより、従兄や親戚の叔父叔母などにうんざりしていたという設定の背景には、ディケンズが子ども時代に親戚のおせっかいで叔父の靴墨工場で働かされた屈辱がある。

#### 引用・参考文献

ピーター・カヴァニー「第4章コールリッジからディケンズへ」、「第5章ディケンズの子どもたち」、『子どものイメージ』江河 徹訳(紀伊国屋書店、1979年)

杉山洋子『『ホリデイ・ロマンス』—ディケンズの小さなさかさまの世界』、『ヴィクトリア朝 文学・文化・歴史』pp.505-519.

J.マニング『ディケンズの教育観』藤村公輝訳(英宝社、1996年)

松村昌家『ディケンズの小説とその時代』(研究社、1989年)

松村昌家『ヴィクトリア朝小説における父と子』(英宝社ブックレット、1991年)

松村昌家 編『子どものイメージ—19世紀英米文学に見る子どもたち—』(英宝社、1992年)

松村昌家 編『ディケンズ小事典』(研究社、1994年)

松村昌家教授古稀記念論文集刊行会 編『ヴィクトリア朝 文学・文化・歴史』(英宝社、1999年)

永岡規伊子「ディケンズの作品における父と娘—『ドンビー父子』と『リトル・ドリット』を中心に」、『ヴィクトリア朝 文学・文化・歴史』pp.437-453.

渡辺孔二「ヴィクトリア朝の冒険小説」、『ヴィクトリア朝 文学・文化・歴史』pp.106-120.

J.R.タウンゼント『子どもの本の歴史』高杉一郎訳(岩波書店、1982年)

ディケンズ『ホリデイ・ロマンス』杉山洋子・富田康子・出水純子・川端有子訳(編集工房ノア、2000年)

ディケンズ『デイビット・コパーフィールド』中野好夫訳(新潮社、1989年)

ディケンズ『大いなる遺産』日高八郎訳(中央公論社、1998年)

Dickens, Charles, Gillian Avery (ed.) *Holiday Romance and Other Writings for Children* (Everyman's Libraly,1995)

\_\_\_\_\_, *The Great Expectations* (Penguin Classics, 1965)

\_\_\_\_\_, 'A Christmas Tree,' *Household Words*, conducted by Charles Dickens, (London: Ward, Lock, and Tyler) The Christmas Number, No.39, December 21, 1850, pp.289-295.

\_\_\_\_\_, 'Where We Stopped Growing,' *Household Words*, conducted by Charles Dickens, (London: Ward, Lock, and Tyler) No. 145, January 1, 1853, pp.361-363.

- \_\_\_\_\_, 'Frauds on the Fairies,' *Household Words*, conducted by Charles Dickens, (London: Ward, Lock, and Tyler) No. 184, October 1, 1853, pp.97-100.
- \_\_\_\_\_, 'A Child's Dream of A Star,' *Household Words*, conducted by Charles Dickens, (London: Ward, Lock, and Tyler), April 6, 1850, pp.25-26.
- \_\_\_\_\_, *All the Year Round*, a weekly journal, conducted by Charles Dickens (London: Chapman and Hall, 1867-68)
- Donovan, Frank, 'VII Some Happier Children,' *The Children of Charles Dickens* (London: Leslie Frewin Publishers, 1968)
- Hunt, Peter, *Children's Literature* (New York: Routledge, 1990)
- \_\_\_\_\_, *An Introduction to Children's Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1994)
- Mackenzie, John M. *Imperialism and Popular Culture* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1986)
- Zipes, Jack (ed.), 'George Cruikshank, Cinderella and the Glass Slipper,' 'Charles Dickens, The Magic Fishbone,' *Victorian Fairy Tales—The Revolt of the Fairies and the Fairies and Elves* (New York: Routledge, 1987)

*"Familiar in their Mouths as HOUSEHOLD WORDS."*—SHAKESPEARE.

---

# HOUSEHOLD WORDS.

A Weekly Journal.

CONDUCTED BY

CHARLES DICKENS.

VOLUME I.

LONDON:

WARD, LOCK, AND TYLER,

WARWICK HOUSE, PATERNOSTER ROW, E.C.

図1 『ハウスホールド・ワーズ』第1巻表紙

"Familiar in their Mouths as HOUSEHOLD WORDS."—SHAKESPEARE.

# HOUSEHOLD WORDS.

A WEEKLY JOURNAL.

CONDUCTED BY CHARLES DICKENS.

N<sup>o</sup>. 2.]

SATURDAY, APRIL 6, 1850.

[PRICE 2d.]

## A CHILD'S DREAM OF A STAR.

THERE was once a child, and he strolled about a good deal, and thought of a number of things. He had a sister, who was a child too, and his constant companion. These two used to wonder all day long. They wondered at the beauty of the flowers; they wondered at the height and blueness of the sky; they wondered at the depth of the bright water; they wondered at the goodness and the power of God who made the lovely world.

They used to say to one another, sometimes, supposing all the children upon earth were to die, would the flowers, and the water, and the sky, be sorry? They believed they would be sorry. For, said they, the buds and the children of the flowers, and the little playful streams that gambol down the hill-sides are the children of the water; and the smallest bright specks, playing at hide and seek in the sky all night, must surely be the children of the stars; and they would all be grieved to see their playmates, the children of men, no more.

There was one clear shining star that used to come out in the sky before the rest, near the church spire, above the graves. It was larger and more beautiful, they thought, than all the others, and every night they watched for it, standing hand in hand at a window. Whoever saw it first, cried out, "I see the star!" And often they cried out both together, knowing so well when it would rise, and where. So they grew to be such friends with it, that, before lying down in their beds, they always looked out once again, to bid it good night; and when they were turning round to sleep, they used to say, "God bless the star!"

But while she was still very young, oh very very young, the sister drooped, and came to be so weak that she could no longer stand in the window at night; and then the child looked sadly out by himself, and when he saw the star, turned round and said to the patient pale face on the bed, "I see the star!" and then a smile would come upon the face, and a little weak voice used to say, "God bless my brother and the star!"

And so the time came, all too soon! when the child looked out alone, and when there

was no face on the bed; and when there was a little grave among the graves, not there before; and when the star made long rays down towards him, as he saw it through his tears.

Now, these rays were so bright, and they seemed to make such a shining way from earth to Heaven, that when the child went to his solitary bed, he dreamed about the star; and dreamed that, lying where he was, he saw a train of people taken up that sparkling road by angels. And the star, opening, showed him a great world of light, where many more such angels waited to receive them.

All these angels, who were waiting, turned their beaming eyes upon the people who were carried up into the star; and some came out from the long rows in which they stood, and fell upon the people's necks, and kissed them tenderly, and went away with them down avenues of light, and were so happy in their company, that lying in his bed he wept for joy.

But, there were many angels who did not go with them, and among them one he knew. The patient face that once had lain upon the bed was glorified and radiant, but his heart found out his sister among all the host.

His sister's angel lingered near the entrance of the star, and said to the leader among those who had brought the people thither:

"Is my brother come?"

And he said "No."

She was turning hopefully away, when the child stretched out his arms, and cried "O, sister, I am here! Take me!" and then she turned her beaming eyes upon him, and it was night; and the star was shining into the room, making long rays down towards him as he saw it through his tears.

From that hour forth, the child looked out upon the star as on the Home he was to go to, when his time should come; and he thought that he did not belong to the earth alone, but to the star too, because of his sister's angel gone before.

There was a baby born to be a brother to the child; and while he was so little that he never yet had spoken word, he stretched his tiny form out on his bed, and died.

of reason, and, in a world full of balances and compensations, its very inferiority has its compensation in the fact that, unlike reason, instinct can never go wrong. If animals cannot understand our language unless in very few instances of ordinary occurrence and when accompanied by sign, gesture, and the expression of the eye, neither can we understand their language, except it have the same mute accompaniments. Though Emerson may say, "that we are wiser than we know," it is barely as possible, with all our undoubted superiority, and all our pride of intellect, that we are not exactly so wise as we think.

#### TYRANNY.

THEY who bear the weight of tyranny  
Must bear it as they may;  
But since I've laid my burthen down,  
I have a thing to say:

My trouble is past trouble now;  
It has long lain with the dead;  
My life is in its inner soul  
No more disquieted.

I own a lovely garden-ground:  
The plants it grows are rare;  
And yet sometimes I almost wish  
The flowers were not so fair.

Were they thistles by the wayside blown,  
I might pluck them and be glad;  
But, gazing on these tender things,  
Their beauty makes me sad.

Though free as fair in others' sight,  
To me they bring the hour  
When in my dearth I was denied  
The gathering of a flower.

The dearth of love, the dearth of hope—  
Life's sweet and common bread,  
When the gracious sun seem'd shrunk and lost  
In the darkness overhead.

I hear the cruel mandate now;  
It shivers through the air,  
A blight upon the living flowers  
I would were not so fair.

I stretch my hand—yet touch them not;  
I cannot well define  
How the force of old repression works:  
I do not feel them mine.

The breeze may sway, the sun may kiss,  
The wind-flower by the wall;  
I stand and watch it wistfully  
To see it fade and fall.

I lift it then, my own at last,  
And hide it in my breast,  
And there one dead-born blessing more  
Is buried with the rest.

But I forget, in musing thus  
On that old distant day,  
The word of counsel I would speak,  
The "thing I had to say."

It is but this: Oh! ne'er deny  
The gifts which Mercy gave,  
Lest a voice that is not loud but deep  
Should curse you in your grave.

For I believe, as here I breathe,  
With every flower down-trod,  
The sin and sorrow of that time  
Are crying up to God.

## HOLIDAY ROMANCE.

By CHARLES DICKENS.

IN FOUR PARTS.

PART I.

INTRODUCTORY ROMANCE. FROM THE PEN OF  
WILLIAM TINKLING ESQUIRE.\*

THIS beginning-part is not made out of anybody's head you know. It's real. You must believe this beginning-part more than what comes after, else you won't understand how what comes after came to be written. You must believe it all, but you must believe this most, please. I am the Editor of it. Bob Redforth (he's my cousin, and shaking the table on purpose) wanted to be the Editor of it, but I said he shouldn't because he couldn't. He has no idea of being an Editor.

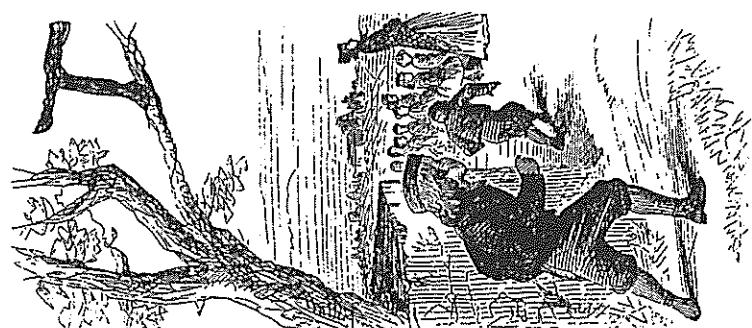
Nettie Ashford is my Bride. We were married in the right-hand closet in the corner of the dancing-school where first we met, with a ring (a green one) from Wilkingwater's toy-shop. I owed for it out of my pocket-money. When the rapturous ceremony was over, we all four went up the lane and let off a cannon (brought loaded in Bob Redforth's waistcoat-pocket) to announce our Nuptials. It flew right up when it went off, and turned over. Next day, Lieutenant-Colonel Robin Redforth was united, with similar ceremonies, to Alice Rainbird. This time, the cannon bust with a most terrific explosion, and made a puppy bark.

My peerless Bride was, at the period of which we now treat, in captivity at Miss Grimmer's. Drowvey and Grimmer is the partnership, and opinion is divided which the greatest Beast. The lovely Bride of the Colonel was also immured in the Dungeons of the same establishment. A vow was entered into between the Colonel and myself that we would cut them out on the following Wednesday, when walking two and two.

Under the desperate circumstances of the case, the active brain of the Colonel, combining with his lawless pursuit (he is a Pirate), suggested an attack with fireworks. This however, from motives of humanity, was abandoned as too expensive.

Lightly armed with a paper-knife buttoned up under his jacket, and waving the dreaded black flag at the end of a cane, the Colonel took command of me at 2 P.M. on the eventful and appointed day. He had drawn out the plan of attack on a piece of paper which was rolled up round a hoop-stick. He showed it to me. My position and my full-length portrait (but my real ears don't stick out horizontal) was behind a corner-lamp-post, with written orders to remain there till I should see Miss Drowvey fall. The Drowvey who was to fall was the

\* Aged Eight.



Initial Illustrations for Parts I-4

図4 『ホリデイ・ロマンス』4つの話の挿絵 (Everyman's Library)